

キヤノングローバル戦略研究所 地球温暖化国内シンポジウム 2015
日本の地球温暖化抑制の 2050 年ビジョンとその実現
Beyond Paris – Vision of 2050 and Getting There from 2030 Target

理事長挨拶

今年末パリで開催される COP21 の国際協議に向けて、各国が温室効果ガス削減の自主目標を提出しつつあります。これらの目標を相互に比較しつつ全体としてその効果は如何程のものか評価が行われていくこととなるでしょう。限界削減費用を比較して、国際的な負担の公平性が一歩進んでいるかどうかにも注目されるところです。また今回の新しい提案は、COP21 の次の目標、つまり地球温暖化抑制の長期目標にうまくつながっていくものであるかどうかにも議論の焦点の一つとなるべきです。それに加え、そもそも世界あるいは各国の 2050 年目標は適正に設定されているのかという議論も改めて必要になってきているように思います。今年 6 月ドイツのエルマウで開かれた G7 サミットにおいて、世界全体の温室効果ガス削減目標として、2050 年に 2010 年比で 40-70%の幅の上限を目指すこと合意され、また 2008 年北海道洞爺湖で開催された G8 サミットにおいて、日本は先進国全体で 2050 年に 2005 年比で 80%削減を提唱しました。今回、このような目標の、適切性について議論もしていただければ幸いに思います。

当研究所では、これまでオーバーシュートシナリオを提議してきております。このオーバーシュートシナリオの、一時的に多くの排出量を許容しながら、最終的に収束していくという姿は、従来型の一直線上に絞りこんでいく形と違うシナリオですが、この場合でも各国が精一杯削減努力をしていくことは当然大前提になっているわけですし、2030 年まであるいは 2050 年までの努力目標及びその実行体制がきちんと整えられ、それが皆で確認されることが前提になっていると考えております。その上で、さらに先行き本当に地球の表面温度を一定の範囲内に抑えるという最終ゴールに結びつけていく過程で、このオーバーシュートシナリオが本当に生きてくるものだと認識しております。そういう全体の将来にわたる大きな構図を、より精緻に描いていけることは、非常に望ましいと期待しております。また、オーバーシュートシナリオについて、もし皆様から評価を頂けるなら、これから国際的に広く認知され全体の流れを決めていくひとつのツールになっていくためには、どのような努力すれば良いかについて、示唆いただければと願っております。主催者側として大きな期待をしておりますので、どうぞ宜しくお願い申し上げます。